

ダンスの魅力に関する 因子分析的研究

— 大阪府下のジャズダンス教室 所属者を対象として —

畑野 裕子

I 研究目的

近年のスポーツブームを背景として、レオタードファッションの流行などに象徴されるように、ここ数年ダンス人口は急増し、⁸⁾⁹⁾ ダンス教室の人氣も上昇してきている。このような人々がダンスを愛好する背景として、ダンスに対する何らかの魅力を仮定することができよう。しかし、このようなダンス教室の実態やダンス愛好者の意識を明らかにした研究²⁾は数少ない。本研究は、ダンスに対する肯定的態度をダンスの魅力としてとらえ、具体的には次の2点を検討することを目的としている。

1. ダンス教室所属者が、ダンスの魅力をどのような因子でとらえているかを明らかにする。

2. ダンス教室所属者が抱いているダンスに対する魅力の程度を、その対象者の属性別に検討する。

II 研究方法

1. 調査対象：調査対象者は、大阪府下のジャズダンス教室所属者460名(男82名、女378名)で、年齢構成は主として10代=122名、20代=226名、30代=74名、40代=31名で、職業構成は主として学生=150名、会社員=172名、主婦=90名であり、ジャズダンスの経験年数は1年以内=304名、1~2年=109名、2年以上=47名であった。本研究では、ダンス専門のスタジオ、百貨店等の文化教室、スポーツセンターなどのジャズダンス教室を対象とし、指導内容はジャズダンス単独、ジャズ&エアロビックス、ジャギー・ダンスであった。(エアロビックスダンス単独の教室は除外)

2. 魅力測定尺度：質問紙の内容は、ダンスの魅力としてファッション性、心理的效果、身体的効果などの下位概念を設定し、各領域に3~5項目を配した計34項目からなるリッカート・タイプの設定尺度であった(5件法)。

3. 調査手続き：各クラスのインストラクターが調査者となり、集合調査法により実施し、自由記名とした。

4. 調査期日：昭和59年9月

III 結果

1. ダンスの魅力を構成する因子について
評定値間の相関行列(34×34)に基づく因子分析³⁾(主因子解→バリマックス回転)を行った。固有値の変動状況を考慮し(固有値=1.0)さらに因子負荷量0.4を基準として検討した結果、次の6つの因子が解釈可能なものとして抽出された。第一因子から順に、「自己顕示性」「身体的効果」「健康」「精神的効果」「社交性」「ファッション性」の因子と解釈・命名された。これら6因子の全体に対する寄与率は60.1%であった。

2. 対象者の属性別にみたダンスの魅力分析
各魅力の因子を代表する項目をそれぞれ3つ選び、その評定値を単純加算し、各因子におけるダンスの「魅力得点」とした。本分析は、先の因子分析を行った対象者の中から、次のようにランダムに抽出して行った。1) 性別分析：男女別に各70名(学生)、2) 職業別分析：主婦、学生、会社員別に各90名、3) 年齢別分析：10代、20代、30・40代別に各100名。

1) 性別分析：魅力得点の平均値を、表1に示した。さらに得点に関し、2(性別)×6(魅力の因子)の分散分析を行ったところ、性の主効果が有意であり(F=7.67, df=1/138, P<0.01)、女性の方が男性よりもダンスに対して有意に高く魅力を感じていた。また、魅力の因子の主効果も有意であり(F=54.25, df=5/690, P<0.01)、表1のように魅力得点の高い順に、「健康」>⁶⁾「精神的効果」≒「身体的効果」>「社交性」>「自己顕示性」≒「ファッション性」となった。さらに、両要因間の交互作用も有意であり(F=15.07, df=5/690, P<0.01)、男性はファッション性の魅力得点が最も低く、これに対し女性はファッション性の魅力得点は3番目に高かった。

2) 職業別分析：魅力得点の平均値を表2に示した。魅力得点に関し、3(職業)×6(魅力の因子)の分散分析を行ったところ、職業の主効果が有意であり(F=7.23, df=2/267; P<0.01)、主婦は会社員(t=3.52, df=267, P<0.01)⁶⁾や学生(t=2.96, df=267, P<0.01)⁶⁾よりも有意に高く魅力を感じていた。また、魅力の因子の主効果も有意であり(F=243.12, df=5/1335, P<0.01)、表2のように魅力得点の高い順に、「健康」>「精神的効果」≒「身体的効果」>「社交性」≒「ファッション性」>「自己顕示性」となった。さらに、両要因間の交互作用も有意であった(F=6.19, df=10/1335, P<0.01)

3) 年齢別分析：年齢別の得点は職業別の得点と類似した結果であり、主婦は30・40代、学生は10代、会社員は20代の結果と同様の傾向を示していた。

表1 ダンスの魅力得点の性別分析(平均値)

	自己顕示性	身体的効果	健康	精神的効果	社交性	ファッション性	全体
男	8.71	12.01	13.01	10.99	10.07	7.80	10.43
女	10.17	10.71	12.90	12.34	10.33	10.83	11.21
全体	9.44	11.36	12.96	11.66	10.20	9.31	10.82

表2 ダンスの魅力得点の職業別分析(平均値)

	自己顕示性	身体的効果	健康	精神的効果	社交性	ファッション性	全体
主婦	8.71	12.37	14.18	13.06	11.53	11.16	11.83
学生	9.02	12.00	13.42	11.22	10.40	9.61	10.95
会社員	7.97	11.58	14.03	11.80	10.39	10.80	11.09
全体	8.57	11.98	13.88	12.03	10.77	10.52	11.29

IV 考察

今回ダンスの魅力として「健康」「精神的効果」「身体的効果」「社交性」「ファッション性」「自己顕示性」の6つの因子が抽出されたが、これは、女子大生のスポーツ参加動機(「親和因子」「社会的承認因子」「美容・健康因子」など9因子)⁴⁾や、婦人体操教室の参加動機(「健康の維持・増進」「ストレス解消」「友だちをつくりたい」など⁵⁾)と類似している。すなわち今回の結果の「健康」=「美容・健康因子」「健康の維持・増進」, 「身体的効果」=「美容・健康因子」, 「精神的効果」=「ストレス解消」, 「社交性」=「親和因子」「友だちをつくりたい」, 「自己顕示性」=「社会的承認因子」と同一のものと思われる。また、「健康」の魅力得点が高かったのは、運動不足の解消など健康観のあらわれと考えられる。一方、本調査結果からダンス特有の因子として「ファッション性」「自己顕示性」が抽出されたが、いずれもその得点は低かった。さらに舞踊そのものに関わるリズムや表現性などの質問項目を設定したにもかかわらず、これらは因子として抽出されなかった。以上のことから、本調査対象者のように経験年数の浅い(1年未満を中心とした)ジャズダンス教室所属者にとってのダンスの魅力とは、自分のために楽しむ活動という自己目的的意識が強く働いていると推測される。

また、男女ではファッション性の因子に対する違いが認められ、その中でも特に「レオタードを着る」の項目について男性の得点が低かった。これは、レオタードがクラシックバレエや女子体操のユニフォームであるというイメージから女性着的なイメージが強く、男性はレオタードに対する抵抗感を持っているのであろう。

職業別(年齢別)の特徴として、主婦(30・40代)の魅力得点が高かったことは、主婦が比較的静的な生活の中で運動不足やからだの不調を感じ

ていること⁷⁾を背景として、家事・育児負担が軽減され、生活をより楽しくするために活動している¹⁾のではないかと考えられる。

今後、経験年数、経験したダンスの種類や学習内容の違い、指導者の問題など魅力に及ぼす要因、および舞踊特有の魅力について検討したい。

V 文献

1. 経済企画庁編, 国民生活白書, 1984, PP. 172-176.
2. 三原みどり, 「社会教育機能としての舞踊」, 舞踊学7: 31-32, 1984.
3. 三宅一郎他(編), SPSS統計パッケージII, 東洋経済新報社, 1977, PP. 131-132.
4. 丹羽昭昭・村松洋子, 「女子大生のスポーツ参加の動機に関する因子分析的研究」体育学研究24-1: 25-38, 1979.
5. 社会体育研究会, 「楽しく、気ながに、美しく—婦人体操のためのプログラム」体育科教育33-4: 70, 1985.
6. 瀧野千春「分散分析における単純効果の検定について」奈良学芸大学紀要13: 163-170, 1965.
7. 山岡誠一他「主婦の健康調査」体育科学6: 254-262, 1978.
8. 余暇開発センター, レジャー白書'84, 1984, p 32.
9. 余暇開発センター, レジャー白書'85, 1985, p 33.